

こらっせ便り

2020年6月13日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>



リフレッシュプログラムは来年に延期

福島子ども・こらっせ神奈川

事務局長 遠野 はるひ

「こらっせ」のプログラムに賛同してくださっているみなさま、支援してくださっているみなさま、「こらっせ便り」をお届けするのが遅くなり申し訳ありませんでした。今年度のリフレッシュプログラムの実施に関して、オンライン事務局会議で話し合いを重ねた結果、今年は中止し来年に延期するということになりました。その経過を説明いたします。

1月の「こらっせ便り」でお知らせしましたように、3月19日に榊葉出身の大学生・佐藤聡君を講師に迎えてキックオフ・ミーティングを開催、春休みには3回、榊葉児童館への応援を送るというスケジュールを組んでいました。しかしながらコロナ禍が広がる中でキックオフ・ミーティングはやむなく中止を決めました。児童館応援については、参加予定の大学生と相談、「自分たちがウイルスを持ちこむことになるのが心配」という意見もあり、対策を考えて1回にして実施しようということになりましたが、その後、現地では保護者に児童館の利用自粛を依頼していると伺い、大学生の応援も中止になりました。

例年3月には、リフレッシュプログラムに向けて実行委員会をスタートさせているのですが、今年は、コロナ禍で子どもたちも大学生も授業が夏休みにずれこむとわかり、8月半ばから11月21日（土）～23日（月・祝日）へと変更を検討しました。しかしながら、秋に第2波が来るという予測もあり、関係各所から情報を集めて相談した結果、子どもたち・大学生の健康を考えると11月実施も断念せざるをえないという結論に達しました。来年の3月の春休みまでの延期を予定していますが、この予定も状況をみながら判断したいと思います。実施が決まりましたら賛同をお願いすることになると思いますので、よろしく願いいたします。

榊葉町は5月25日から授業が再開。学校のウェブサイト
で子どもたちの元気な姿を見ることができます。榊葉町・山
北町は感染者がでていません。3密が好きなコロナウイルス
は、緑ゆたかで広々とした場所は嫌いなのでしょう。

こらっせのホームページ、Twitterを是非ご覧ください。

WEB



Twitter



「学生・子ども甲状腺エコー検査@ 東京学芸大学」に参加

事務局 横山 満里奈

2月16日に東京学芸大学で行われた「学生・子ども甲状腺エコー検査」にボランティアとして参加しました。主催は東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンターの大森直樹教授と関東子ども健康調査支援基金です。医師や技師のほか、学生や市民ボランティアが多数参加しました。

今回のエコー検査を受けた人は27名です。募集対象は原発事故当時に18歳以下だった7歳～27歳が優先です。申し込みは、ホームページの予約フォームから行い、費用は2000円を実費負担し、高校生以下は保護者の付き添いが必要です。



〈ボランティアとして受付を担当しました〉

エコー（超音波）は空気を通さない特徴があり、体と機械の密着度を上げるために甲状腺付近にゼリーをつけます。人の耳には聞こえない音を体に当てて、体内の組織からはね返ってきた音（エコー・こだま）を画像にします。基本的に痛みを感じず、被ばくもありません。検査時間は、問診票記入などの手続きに約20分、検査時間は約5分で、終了後のアンケートを含めても30分程度です。

検査後に送られる報告書には、総合所見やのう胞と結節（しこり）の検査結果が記載されています。のう胞は、中に液体の溜まった袋状のものです。通常は球状の形で小さいものは触っても分かりません。一般的に痛みがなく、ほとんどが良性です。多くの子どもに見られ、数よりも大きさを重視します。

結節は、大きさだけでなく形状も見ます。悪性の疑いがある場合は精密検査を勧めます。結節に細い針を刺して細胞を取り、顕微鏡でその性質を判断する細胞診検査などで判定します。

長期の見守りが必要

甲状腺は首の前方「のどぼとけ」のすぐ下にあり、蝶が羽を広げたような形です。大きさは縦約4cmで重さは大人でも20g以下と小さいですが、体に必要なホルモン（女性ホルモン、男性ホルモン、副腎皮質ホルモンなど）が作られています。ホルモンは体内の活動を調整し、細胞や組織の発育に関わります。甲状腺はそうしたホルモンを作る臓器のひとつで、海藻などに含まれるヨウ素が材料です。

被ばくによる小児甲状腺がんは、時間が経ってから現れる場合があります。震災当時は放出された放射能を吸いこみ、内部被ばくをすることになりました。特に放射性ヨウ素（ヨウ素131）は甲状腺に取り込まれることから、今後も長期に経過を見守っていく必要があります。

資料：関東子ども健康調査支援基金 HP <https://www.kantokodomo.info/yotei.html>

子どもたちの健康面を見守る

横浜市立中学校養護教諭 金澤 あゆみ

2012年夏、リフレッシュプログラムが始まった年、学習ボランティアとして参加しました。そして翌年からずっと、参加者全員が安心安全に宿泊できるよう保健担当として活動させていただいています。福島県出身の私は、当時、実家の家族の生活を支えながら神奈川で仕事をしていたものの、「何か自分にも出来ることはないだろうか」と思っていましたから、福島の子どもたちを神奈川に『こらっせ!』と受け止めてくれるこの活動に、大きく心を動かされたのです。

初期は4泊や3泊していた頃もあり、初めて出会う子どもたちの長期の健康を保つことにたいへん気を使いました。楽しいばかりにはしゃいだり、眠らなかつたり。好き嫌いが多くて食べられなかつたり、多少ケガをしたり、お腹や頭が痛くなつたり。緊張したり、お友達と気持ちがすれ違って元気がなくなつたり。集団で宿泊するといろいろなことが起こります。その度に、大学生やスタッフが寄り添って見守ってきました。大切なお子さんを何事もない状態でお返しするのは当たり前。

緊張感の中の楽しみ

迎える私たちみなさんの願うところは、一つでも二つでも『楽しかった』『行ってよかった』という思い出とともに帰宅してほしいということです。どんなに回を重ねても、リピーターが増えても、参加する子どもたちを迎える日は、いつも新鮮な気持ちで緊張感と楽しみな気持ちが入り混じります。

どんな出会いをした子どもやがて大人になりますが、一人ひとり大切にされた感覚、家から離れて過ごしたキラキラした時間が、成長する上で良い影響（栄養?）となってくれたらいいなと願っています。

スタッフ・学生を始め、協力してくださる町の方・店の方・賛同者などボランティアする側の多くの方たちの近くで、その温かい気持ちに触れてきました。風評被害を含め、気持ちの上では被災したであろう自分は、活動を通して、子どもたちと同じように励まされ、救われてきました。ありがとうございました。

今年は、新型コロナウイルス感染症のために緊急事態宣言が出されました。解除されたものの、『こらっせ』とはとても言えない状況です。今は、感染に注意しながら日常生活を大切に、またいっしょに素敵な時間を過ごせることを楽しみにしています。



〈子どもたちに健康面の注意を説明（2019年）〉

コロナウイルスによる小学校への影響

横浜市立小学校学校栄養職員 鈴木 桃子

3年間学生ボランティアをし、その後社会人になった後もこらっせに関わらせていただいている鈴木（旧姓 窪田）と申します。私は現在、横浜市立の小学校で栄養士として働いていることから、コロナの影響による小学校の現状についてお伝えできればと思います。

横浜の小学校では3月から5月いっぱいまで休校が続きました。休校中は児童へのサポートとして電話で家庭での状況を把握し、必要な学習課題を各家庭へ届けたりなどの対応をしていました。そして、緊急事態宣言が解除された6月から学校が再開しました。はじめの2週間はクラスを半分にし、午前と午後に分けて授業を行っています。人数が少ない分、密な空間を避けることができますが、児童が帰った午前と午後の1日2回消毒を行うことや、午前と午後の2サイクル分授業を行わなければならないことなど、教職員の負担は大きいようです。その後の2週間は午前中のみクラス全員が集まる集団授業を行っています。



〈子どもと一緒に夕食のあいさつ（2014年）〉

学校生活はこれまで通りに行えない部分が多く、様々な面で「新しい学校生活」を意識した取り組みをしています。例えば、手洗いが十分にできるように時間を確保する配慮、マスクの全員着用、教室の定期的な換気、保健室では体調の悪い児童を同室にしないなど対応は多岐にわたります。また、向かい合わせの座席は感染のリスクが高いため、やむを得ずそのような座席になる教室では机の真ん中にシートを設置し、対面での感染を防ぐなど学習環境の整備も行っています。

7月から給食再開

学校給食は7月から再開の予定です。この再開にあたっては、感染リスクができるだけ下がるような対策を検討しています。まず、献立は例年の予定献立から、品数を減らした献立に変更し、配膳の時間や人手の軽減をしています。また、配膳にあたっては自分の給食は自分で準備し一度配膳したものは食缶に戻さない、複数の人が配食に関わらないなどの配慮をします。また、食べる際には全員前向きで会話はなしのルールです。今までの楽しい給食時間…とはかけ離れた形式になるため、栄養士として心苦しい気持ちではありますが、感染を防ぎ、少しでも早く日常が戻るためにも今はやるべきことを可能な限り実施することが大切だと感じています。